



統内新水路

大正

昭和

十勝川をまっすぐに

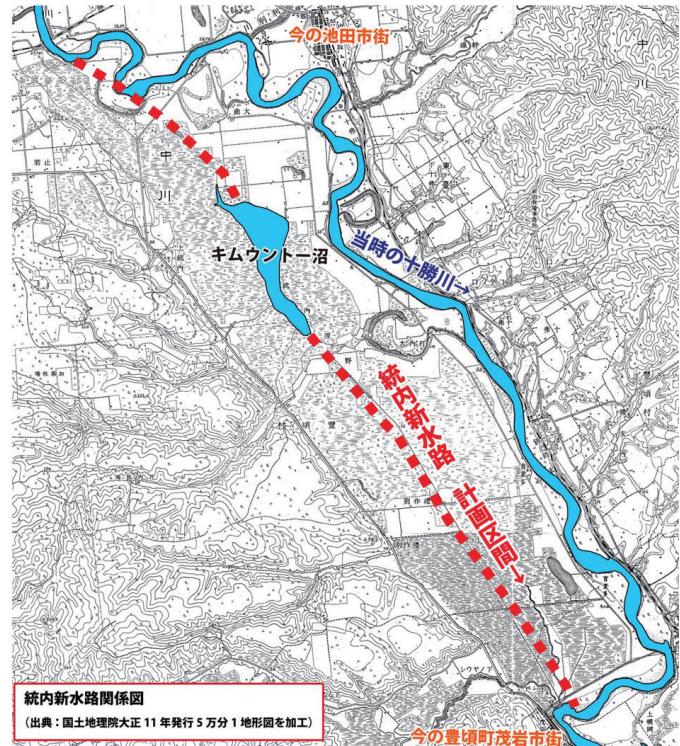
昭和初期の新水路掘削工事としては、(1) 十勝川本流、(2) 利別川新水路、(3) 利別川合流点付近の切り替え、(4) 支川の途別川、帯広川、猿別川、売賣川の切り替えと十弗川の新水路等が計画されていました。なかでも十勝川本流の統内新水路は最大の工事として位置付けられていました。

千代田鉄道橋からキムウント一沼を経由し、茂岩までの約15キロを結び、ジグザグからまっすぐな形にすることで十勝川の水がスムーズに流れるようになりました。また当時、湿地帯が多かった統内原野（池田・幕別・豊頃にまたがる平野部）の水はけをよくして、新しく農地を作りやすくすることもねらいの一つでした。

昭和12年9月、もうすぐ工事が終わろうとしていたころ、先日からの雨で増水していた十勝川は洪水となって新水路に押し寄せ、自然に通水を果たすという歴史的瞬間を迎えたのでした。



初期の十勝川における治水事業の中心を担った統内新水路



統内新水路の計画区間と当時の十勝川の位置関係

人、機械、馬も活躍

水路の掘削には「エキスカベーター」という機械が使われました。いくつものバケットがついたベルトコンベアーガ回転して次々に土を掘っていくというものです。移動のための線路が敷かれ、土運車という土を運ぶ台車や、それをひっぱるための蒸気機関車がその上を走りました。

刑務所の受刑者も動員されて作業に従事し、また当時農業で重要な役割を果たしていた馬も土砂を運びました。



統内新水路をほるエキスカベーター（十勝川写真で綴る変遷）



20t スチーム機関車による掘削土の運搬（十勝川写真で綴る変遷）

平成

令和

100年